

東アジア共同体評議会

「政策本会議」第11回会合

「ASEAN+3サミット」「東アジア・サミット」を
総括する
— 速記録 —



日本国際フォーラム「会議室」にて

2005年12月21日（水）

東アジア共同体評議会

まえがき

この速記録は、東アジア共同体評議会（CEAC）政策本会議第11回会合の議論を取りまとめたものである。当評議会の政策本会議は、初年度において「東アジア共同体構想の現状、背景と日本の国家戦略」（第1 - 8回）、「日本の農政改革と国際交流への対応」（第9回）をテーマとして9回の会合をもったあと、本年度（6月1日以降）においては「NEAT東京総会に向けて」（第10回、8月11日）について審議を行った。

第11回会合は、2005年12月12日に「ASEANプラス3サミット」が、12月14日に「東アジア・サミット」が、それぞれマレーシアのクアラルンプールで開催されたことに鑑み、12月21日に、高田稔久外務省アジア大洋州局審議官、山田滝雄同省同局地域政策課長を報告者に、田中均前外務審議官をコメンテーターに迎え、「『ASEAN+3サミット』『東アジア・サミット』を総括する」とのテーマで出席議員全員による自由討論を行った。

この速記録は、上に述べたような当評議会政策本会議の活動の内容を、当評議会議員を中心とする関係者に報告することを目的として、作成されたものである。ご参考になれば幸いである。

2006年1月27日
東アジア共同体評議会
議長 伊藤 憲一

第 1 1 回政策本会議速記録

テーマ 『「ASEAN+3 サミット」「東アジア・サミット」を総括する』

目 次

1 . 出席者名簿	- 1 -
2 . 速記録	- 3 -
(1) 基調報告 報告者：高田 稔久（外務省アジア大洋州局審議官）	- 3 -
(2) 基調報告 報告者：山田 滝雄（外務省アジア大洋州局地域政策課長） ..	- 7 -
(3) コメントーター：田中 均（前外務審議官）	- 10 -
(4) 自由討論	- 12 -

1. 出席者名簿

日 時：2005年12月21日（水）午後2時より午後4時頃まで

場 所：財団法人日本国際フォーラム8階会議室

テーマ：「ASEAN+3サミット」「東アジア・サミット」を総括する

報 告 者：高田 稔久 外務省アジア大洋州局審議官

山田 滝雄 外務省アジア大洋州局地域政策課長

コメンテーター：田中 均 前外務審議官

出席者：【役員・議員等】

< 顧問 >

羽田 孜 衆議院議員

< 副会長 >

柿澤 弘治 元外務大臣

< 議長 >

伊藤 憲一 日本国際フォーラム理事長

< 副議長 >

石垣 泰司 日本国際フォーラム参与

大河原良雄 世界平和研究所理事長

黒田 眞 安全保障貿易情報センター理事長

畠山 襄 国際経済交流財団会長

山本 正 日本国際交流センター理事長

吉田 春樹 吉田経済産業ラボ代表取締役

< シンクタンク議員代理 >

浅見 唯弘 国際通貨研究所専務理事

新井 洋史 環日本海経済研究所総務課長

栗原 良男 農林漁業金融公庫調査室国際関係担当主任調査役

< 有識者議員 >

大江 志伸 読売新聞社論説委員

進藤 榮一 筑波大学大学院名誉教授

田久保忠衛 杏林大学客員教授

田島 高志 東洋英和女学院大学大学院客員教授

山澤 逸平 国際大学学長

広中和歌子 参議院議員

富山 泰 時事通信解説委員

山下 英次 大阪市立大学大学院教授

【オブザーバー】

荒池 克彦	外務省アジア大洋州局地域政策課外務事務官
荒瀬 壘	財務省国際局地域協力課企画係長
岡崎 敏彦	農林水産省大臣官房国際部国際調整課総括係長
早田 豪	経済産業省通商政策局国際経済課課長補佐
松島 大輔	経済産業省通商政策局アジア大洋州課課長補佐

【ゲスト】

田中 茂	中曽根元総理秘書(中曽根事務所)
------	------------------

[アイウエオ順]

【事務局】

福田 利夫	東アジア共同体評議会事務局長
渡辺 繭	東アジア共同体評議会事務局員
野呂 尚子	東アジア共同体評議会事務局員
藤井 美幸	東アジア共同体評議会事務局員
林 由佳	東アジア共同体評議会事務局員
金 ゼンマ	東アジア共同体評議会臨時事務局員補
幸保 貴也	東アジア共同体評議会臨時事務局員補

2. 速記録

テーマ 『「ASEAN+3サミット」「東アジア・サミット」を総括する』

(1) 基調報告 報告者：高田 稔久（外務省アジア大洋州局審議官）

伊藤憲一 それでは、定刻になりましたので、第11回政策本会議を開催させていただきます。ちょっとおくれて3時ごろからですが、羽田元総理が駆けつけてくださるということでございます。

クアラルンプールで「ASEANプラス3サミット」、「東アジア・サミット」が開催された直後でございますが、本日は、外務省から、その会議に参加された高田稔久アジア大洋州局審議官、山田滝雄アジア大洋州局地域政策課長にご出席いただいています。どうも今日はありがとうございます。

また、コメンテーターとして、つい最近まで外務審議官の要職にあられた田中均さんにお越しいただいております。なお、田中さんには有識者議員として我々の仲間に入ってくださいましたので、そのこともご報告させていただきます。

それでは、まず高田さんから、ついで山田課長からご報告願ひ、その後、田中さんからコメントをいただいて、その後、全員でいつものようにフリー・ディスカッションをしたいと思います。

それでは、高田審議官、よろしくお願いいたします。

高田稔久 それでは、きょうは私のほうから、ASEANプラス3首脳会議、それから、東アジア首脳会議全般の概要と、それから、意味づけといいますか、評価についてご報告を申し上げます。その後、横におります山田課長のほうから、彼は、もう皆様よくご承知のとおり、2年間、地域政策課長ということで、このプロセスをフォローしてまいっておりますので、いろいろと実際の交渉の雰囲気等もご説明できるのではないかと思いますけれども、経緯、あるいは背景といったものについて、ご報告をさせていただきたいと思ひます。

それでは、まず、お手元に2枚紙の小泉総理の東アジア首脳会議等への出席という紙と、それから、フォーラムのほうで用意をしていただきましたそれぞれ東アジア首脳会議に関するクアラルンプール宣言、それから、ASEANプラス3首脳会議についてのクアラルンプール宣言を適宜ご参照いただきながら、ご説明をしたいと思います。

こちらの紙のほう、まず、東アジア首脳会議と書いてあるんですけど、時系列、それから、説明の必要性から、ASEANプラス3のほうをご説明したいと思います。

今年のASEANプラス3首脳会議は、12月12日午後、昼食から始まりまして、午後は2時間程度でございますけれども、行われました。ここでは宣言が出されまして、1つは、ASEANプラス3協力が引き続き東アジア共同体形成の主要な手段であるということ。それから、2007年に東アジア協力に関する第2共同声明等を作成するための努力を開始すること。ご承知のとおり、第1の声明というのは99年に出されておるわけでございます。具体的に申しますと、前文のCONVINCED、6パラになりますか、CONVINCEDというところで始まるところがございませ

ども、そこに「CONVINCED that the ASEAN Plus Three process will continue to be the main vehicle in achieving that goal」という、前のパラで東アジアコミュニティーのことを言及したところを受けて、そういう表現がございます。

それから、2点目のところは、主文のところでも2がございます。ここで、この2007年にちょうど10周年になりますけれども、この東アジア協力についての第2の共同声明発出の努力を開始するというところでございます。これで、ASEANプラス3のほうは、これまで97年の経済危機を背景として発足して、8年の実績を有するわけですが、その実績のもとに、その重要性を再確認して、そして、この10周年に当たる再来年に第2の共同声明、それから、今後の作業計画ということを作成していくことに合意をしたということでございます。これは、そういう歴史、あるいは実績を有するASEANプラス3協力のさらなる発展、モメンタムを維持・強化して、東アジア共同体形成を視野に入れた地域協力を推進する上でのまた新たな前進ということが言えるのではないかと考えております。実際の議論の場では、小泉総理からは、1つは、喫緊の課題であります鳥インフルエンザについて、我が国としてのアジアに対する1億3,500万ドルの支援策の表明を行い、それから、経済連携ですとか、あるいは、通貨金融協力といったような、地域の一層の繁栄の確保でありますとか、あるいは地域の共通意識の形成の促進、それから、ASEAN統合の支援の重要性というようなことについてご発言をいただいております。

それで、それとの関連で対比をしながらご説明をしようと思っておりますけれども、東アジア首脳会議のほうでございますけれども、これは、2日後の14日の午前に、ASEANプラス3に加えまして、ご承知のとおり、インド、豪州、ニュージーランド首脳が出席をして開催されました。それで、会議が、冒頭、公式会合というんでしょうか、オープニングのところ、アブドラ・マレーシア首相があいさつをされたセッション、その後、休憩に入りまして、あとはリトリートということで、首脳間の大所高所からの率直な議論が行われたということなんですけれども、その冒頭に、ロシアのプーチン大統領がマレーシアのゲストということで参加をし、発言をいたしました。これは、ちょうど今年から、ASEAN・ロシアの、ASEAN+1の首脳会議が開催されるということで、まさに同じ時・同じ場所にプーチンさんがいて、もともとロシアの参加問題というのは1つの大きな問題であったわけですが、リトリートの冒頭、ゲストとして参加をするということで、今年についてはそういう形での決着といえますか、形になったということでございます。

会議の中身そのものにつきましては、リトリートでございますので、細かく申し上げることはできませんし、実は傍聴といえますか、それも非常に限られた方だけが聞いている話でございますので、中身について詳細は省略させていただきますけれども、地域協力ということについて、各首脳が大局的な見地からかなり率直にいろいろと話をされて、雰囲気も全般的によかったというふうに聞いております。

そこで、この東アジア首脳会議の評価ということなんですけれども、私ども、感想としては、まづもって、いろいろと昨年、一昨年来、議論がございまして、また今年になってもいろいろとあったんですけれども、こういう形で第1回東アジア首脳会議が発足をし、会議自体、一応成功であったと。それから、事前の折衝はいろいろございましたけれども、結論として申し上げれば、バランスのとれたといえますか、そういう宣言が発出をされたということで、世界の中で注目されつつ行

われたこの首脳会議でありますけれども、まず、発足し、1回目としては一応成功裏に行われたと、そういうふうを考えております。

それで、具体的な成果ということで申し上げますと、まず、これも宣言文として申し上げたいんですけれども、1つは目標設定ということが上げられるかと思えます。まず、こちらの東アジア・サミットに関するクアラルンプール宣言というのがありまして、表題の下のほうでアジアサミットと書いてある紙でございますが、このDO HEREBY DECLAREという主文の第1のところ、FIRSTというところで、後段でございますけれども、「with the aim of promoting peace , stability and economic prosperity in East Asia」ということで、まず、こういう会合の目標ということが、この東アジアの平和、安定、経済的繁栄の推進ということであつたわけですが、その上で発足をしたわけですが、これが今後どういうことになっていくのかということでございます。私どもがこの準備の過程で重視をしておりましたのは、当然、ASEANプラス3、あるいはその他の既存の枠組みと今回開催することとなった東アジア首脳会議の位置づけと。特に、共同体形成においてどういう役割を果たすのかということでございますけれども、これについては私どももいろいろと外交努力を行ってまいりました。結論から申しますと、まず、前文のところ、前文の最後から2番目のところです。その紙ですと一番下になりますが、「could play a significant role」という表現になっております。「SHARING the view that the East Asia summit could play a significant role in community building in this region」ということ、それが1つ。それから、もう一つは主文の第2パラでございますが、SECONDと書いてあるところで、「SECOND , that the efforts of the East Asia Summit to promote community building in this region」ということで、こういう形で言及がなされております。

先ほど申し上げましたASEANプラス3首脳会議の宣言のほうでは、申しましたように、主要な手段ということになっております。それから、その他お読みいただければ、何力所かに明確な形で「East Asia community building」ということも出てきておりますので、これをどう評価するかということですが、実際のところ、ASEANプラス3のほうは、8年の歴史とそれだけの協力実績がある。17分野48協議会で実際に進んで、そういう実際の実績の上に今後ともやっていく。それから、東アジア首脳会議のほうは、非常に重要だと考えておりますけれども、まずはこれは出発点ということで、全体として両方を見ますと、これはこういうことで、それなりの結果であるのかなというふうに考えております。したがって、両方とも、ちょっとまた後ほど申し上げますけれども、ASEANプラス3のほうも、今後ともやっていくんだと宣言に書いてございますし、東アジア首脳会議のほうも毎年開催ということで進んでいきますので、当面は2本立て、並行して共同体形成に向かって動いていくということになるかと思っております。

それから、もう一つは、この東アジア・サミットが単なる対話の場なのかと。それとも、さらに踏み込んで具体的な協力をするかということですが、これは、結論から申しますと、一重丸か三角ぐらいかなというふうに思っておりますけれども、プラスの側面のところは、具体的には宣言主文の4というところでございますけれども、ここで、ティレが3つございますが、1番目では、政治、安全保障の問題について議論し、協力を進めていく。それから、第2ティレでは、いろいろと経済的な問題につきまして、開発・発展、金融財政の安定、エネルギー、それから、経済統合・成長、貧困削減、開発格差の是正といったようなことがうたわれております。それから、さら

に第3ティレでは、文化的な相互理解、人的交流、それから、環境、感染症の防止、あるいは災害対応といったようなことについてでして、かなり分野を上げて言及をされているところでございます。実は、このほかに鳥インフルエンザに関する東アジア首脳会議の宣言というのでも出されておりました、まさにこういう宣言が、ASEANプラス3のほうではなくて東アジア宣言、東アジア首脳会議の宣言で出された、これも1つの象徴的なことかと思えますけれども、そういうことが入っているということでございます。他方、もう皆様ご承知のとおり、今回初めてでございますので、実際上こういう協力がどう進んでいくのか、あるいは進めていけるのかというのは、また今後にかかっているということでございます。

それから、次の点といたしましては、私どもが重視しておりましたのは、理念とか原則といったようなことについて、どういう方向性が示されるのかということでございますけれども、これについては、東アジア首脳会議におきましては主文の第3のところでございますが、「THIRD, that the East Asia summit will be an open, inclusive, transparent and outward-looking forum in which we strengthen global norms and universally recognized values with ASEAN as the driving force」とありますけれども、まず、この性格といいますか、原則として「open, inclusive, transparent and outward-looking」ということが明確に書かれております。それから、普遍的価値の関係では、細かな例示ということではないわけですが「global norms and universally recognized values」を強化していくということが入っておりまして、これも成果であろうと思っております。ただ、また、これも実際にいかにこういうことに裏打ちをされた実際の協力ということを進めていけるかということが今後の課題であると思えます。

それから、あと、毎年開催ということについてちょっと補足をいたしますと、宣言文の第5パラでございます。ここはいろいろとモダリティーの話が書いてあるんですけども、その第2のところ、宣言ではregularlyと。それから、次の第3で、ASEANの首脳会議とback-to-backで行われるということでございますけれども、実際の議論で、毎年開催をするということについてコンセンサスができて、来年の議長国でありますフィリピン・アロヨ大統領のほうから、セブ島でしたいということがございました。実はこの宣言のほかに、議長国・マレーシアのチェアマンズステートメントというのが出されております。その日の夕刻に出てまいりましたけれども、そこで明確に来年の12月13日にセットということが、それから、アニュアルリーということで表明されていきます。ちなみに、今、議長声明というふうに申しましたけれども、議長声明はこの宣言の中の、ちょっと重複するところもあるんですけども、基本的にはちょっと角度を変えて説明をしたということで、矛盾するものには、実はそういう動きがぎりぎりまでございましたけれども、結果的には重複して言及するところは違う形で言ったというような内容になっています。それから、宣言の中には入ってきておらない、例えば北朝鮮の問題とか、そういうことに言及をされた声明でございます。

あと、まず、日中関係とか中国の問題でございますけれども、報道では、かなり現在の日中関係の政治面そのものとこの東アジア首脳会議、それから、将来の共同体形成をめぐる、かなり日中のつばぜり合いといいますか、あるいは、パワーゲームというようなことが報道されましたけれども、まず、実際の会議、一連の場では、この日中関係が東アジア首脳会議をドミネートとしたと、

そういうことではないと思います。それから、中国の考え、当初、自分のところで主催をしてというようなことを提案して、相当熱心だったのが、その後の参加国の拡大、その他で熱意が冷めてい
るんじゃないかというようなこともございましたけれども、基本的に東アジアの地域協力、そういうことについての中国の関心というのは冷めていないと思います。温家宝首相の実際のリトリートの発言、一部だけご紹介をしますと、安定した国際関係、それから、協力をするとということについてはぜひやっていきたいということを率直に言っておられました。ただ、全体として進めていく中で、当然、それぞれの考え方といいますか、立場なりスピード感なり、そういったことの違いはございますので、まさに私どもとしては、全体として望ましい方向への地域協力、あるいはcommunity buildingということをや
る中で、言うべきことは当然言っていくということだと思いますけれども、会議そのものについて言えば、何かそこで日中関係に大きく影を落として、それでドミネートされるということではなかったと思います。

それから、もう一つ、ロシアの話を冒頭申し上げましたけれども、ロシアについては、今後、将来の参加について検討をしていくということになっております。プーチン大統領自身、参加をしたリトリートの冒頭で、参加への希望というものを明確にしておりますし、おそらく現在では、国の数だけで言えば、ロシアの参加を認めるということだろうと思いますけれども、一方で、実際の協力関係といいますか、あるいは、参加のための参加、拡大のための拡大であってはならないと、そういう声もございますので、これは今後議論されていく問題でございます。

アメリカでございますけれども、私ども、これまでの過程でも、アメリカに対してはいろいろと説明、透明性に心がけてきたつもりでございます。また、今後とも、よくアメリカとはいろいろと話をしていかなければならないと思っております。アメリカの参加、あるいは関与といったような問題、引き続きこれは非常に重要な問題でございますので、こういった点について、また今後ともよく、これは当然、いろいろとお考えをお聞かせいただければと思いますけれども、考えていきたいと思っておりますのでございます。

私のほうからは以上です。

伊藤憲一 では、続いて、山田課長からどうぞ15分が20分、よろしく願います。

(2) 基調報告 報告者：山田 滝雄（外務省アジア大洋州局地域政策課長）

山田滝雄 まず、2つの東アジア首脳会議とASEANプラス3首脳会議が両立するという状況なんですけれども、一見、確かにわかりにくいところはあるとは思いますが、結果的には、なかなかいいバランスができてつあるのではないかと考えております。

と申しますのは、去年、東アジア・サミットをやってはどうかという話が出てきたときに、田中外務審議官のもと、私ども、いろいろ議論をさせていただいて、東アジアではどういう形の首脳会議が一番いいのかということをいろいろ考えて議論をしたことがございます。東アジアというのは、ヨーロッパとは違って、なかなか外縁がはっきりしない地域です。ヨーロッパは、1950年代に統合が始まったときは、東欧とは鉄のカーテンで仕切られており、地中海の向こうはあんまり大きなパートナーがいなくて、大西洋の向こうにはアメリカがあっただけなんです。一方、我々には、

豪州、NZ、インドという非常に重要で大きな近隣のパートナーがいて、ヨーロッパとは全く違うような状況のもとで共同体形成をやっていかなきゃいけない。ただでさえ、東アジアというものにはヨーロッパほど明確なアイデンティティーがない中で、そういう重要なパートナーが近隣にいる。これをどういうふうに考えて、我々としての共同体形成をやっていくのかと、そういう問題意識を持っているいる考えていたわけです。

そこで出てきたアイデアというのは、東アジア・サミットというのを2部構成でやってはどうかというものでした。ASEANプラス3だけのセッションと、それから、それ以外の豪州、NZ、インドを入れた拡大セッション、こういう2部構成でやるのが、一番この地域の現実に適しているんじゃないかという、そういう議論をし、また、そういう考え方をASEAN側に示唆したことも実はございます。ただ、結果的には、豪州、NZ、インドいずれも、拡大セッションだけに入るのは嫌だというようなことがあったようで、このアイデアが受け入れられることにはならなかったんですけども、今回、最終的に出てきた形を見ますと、結局、ASEANプラス3首脳会議は今後も引き続き共同体形成の「主要な手段」として機能し続ける、しかし、同時に、メンバーシップを拡大した東アジア・サミットのほうも、共同体形成に「重要な役割を果たす」ということが確認されわけです。東アジア・サミットという看板がかかっているのは一方だけなんですけれども、実質的には私どもの最初考えていた案にわりと近いような、この地域の現実に適した形態ができてきたのではないかと考えております。ですから、まだまだいろいろと調整していかなきゃいけないところはありますけれども、概ねよいバランスができたのではないかと、そういうふうを考えています。もちろん、そこに至る過程の議論というのはなかなか大変で、ほんとうに今までアジアでこれだけ熱く、しかも内容の濃い議論をしたということはなかったんじゃないかと思っております。ただ、結果的には、すべての国が100%じゃないですけども、それなりに満足する形でコンセンサスができて、サミット自身も非常にいい雰囲気のもとで行われましたし、首脳宣言もちゃんと出すことができましたので、全般としてはよかったと思っております。

今後、東アジア・サミットを、どうやってほんとうに意味のあるものにしていくのかということ、これはまだまだいろいろ宿題の多いテーマであるというふうに考えております。1つには、東アジア・サミットの下でいかにして具体的な協力をやっていくのか、これがもちろん大きなテーマであります。それと同時に、私自身の個人的な印象を交えて申し上げますと、東アジアではこれまで、機能的アプローチということで、いろんな機能分野で具体的協力を積み重ねると、FTAであるとか、鳥インフルエンザ対策であるとか、そういう機能的な協力を進めて、その先にコミュニティー形成を目指そうということをやってきたわけなんです。他方、同時に、私どもは、東アジアにおいては政治的価値が非常に多様であり、また、安全保障面でも脅威認識が多様で、地域全体を包含する安全保障の枠組みがなく、そういう意味でファンダメンタルなところが非常に脆弱な地域であるということ、これも明確にしてきました。そういうことから、今回の首脳宣言で、普遍的価値というものの重要性、それから、グローバルな規範を遵守する重要性ということを出せたのはよかったと思うんです。しかし、今日この地域では中国とかインドといった新たなメジャープレイヤーが出てきている、それに伴って、政治、安全保障面でも新たなダイナミズムが生まれていることを考えると、やはり機能的アプローチはもちろん引き続き重要だとは思いますが、政治、

安全保障面におけるしっかりとした信頼醸成というものを早晚始めないといけないのではないかと
いうことを感じました。特に東アジア首脳会議というものを、真の意味で戦略的・大局的な対話の
場に発展させていくのであれば、この一番本質的な問題について、真剣に考えなくちゃいけない時
期に来ているように思います。

もう一つ重要なのはロシアの参加問題です。これは来年末の第二回の東アジア・サミットに向
けて大変重要な問題になると思います。といいますのは、今回行われたASEANとロシアの首脳会
議において、これから毎年ASEANとロシアの間で首脳会議を持つということにASEANは合
意しました。ですから、来年のセブ島における第二回東アジア・サミットの際には、再度プーチン
大統領が現地いらっしゃることになりますし、その翌年もまたその翌年も状況は同じというこ
とで、ロシアの参加問題について、きちんとした考え方をまとめなければならない必要があるのだと
思います。

それから、ASEANの役割についても一言申し上げたいと思います。今回の東アジア・サミ
ットでは、日・中・韓だけではなく、インド、豪州、ニュージーランドという、おのおのに主張のあ
る重要なプレーヤーが集まったわけです。その調整プロセスはなかなか厳しいものがあつたんです
けれども、今回ASEANが、内部では色々な意見の対立を抱えつつも、最後まで結束を保って、
コーディネーターとしての役割を果たし切ったと。これは、なかなか大変なことで、我々としては、
素直に評価すべきだと思っております。東アジアという地域は、いろんな意味で多様で不確実性の
残された地域でありまして、日本や中国などのメジャープレーヤーだけが地域協力をやろうと思っ
てもなかなかうまくいかないのではないかと思います。ですからASEANのようなコーディネ
ーターの役割が重要なのです。これは、80年代のドイツ政治に似ていると考えて頂ければわかりや
すいのではないかと思います。80年代のドイツでは、社会民主党(SPD)とキリスト教民主同
盟(CDU)という2大政党の間に自由民主党(FD)という小政党がいて、それがバランスをと
って安定した政治体制を作っていました。ところが今日ではSPDとCDUが大連立を組もうとい
う話になっており、むしろ政治的安定性が損なわれています。それと同じように、もし東アジアに
日中しかなければ、地域協力を進めることは大変なことだったと思います。ASEANなかりせば、
おそらく東アジア共同体構想なども出てきていなかったでしょうし、今日のように地域協力の枠組
みが発展することもなかったと思います。ですから、やっぱりASEANとの関係というのを引き
続き強化していくことが重要です。強靱でまとまったASEANというのは地域全体にとって大切
な存在ですので、ASEANの統合を助けていく、これが大変大事なことだと思います。今回の日
ASEAN首脳会談では、「日ASEAN戦略的パートナーシップの拡大・深化」というテーマの共
同声明を出しました。かつてASEANと日本の関係というのは典型的な援助国と被援助国の関係
だったと思うんです。しかし、今日の関係はそうではなくて、真に対等で、地域の将来の秩序を形
成していく上で、ほんとうに大事な、戦略的なパートナーシップになったと考えています。今回の
声明は、そういった問題意識から、ASEANを重視しているんだということを具体的にあらわす
ために出したものでございます。

以上です。

伊藤憲一 冒頭ちょっと言い忘れましたが、一応オンレコということでやらせてもらいたいんで

す。というのは、本日欠席された方々の間で速記録を読みたいという希望が非常に強いものですから。ただし、「ここはオフレコだ」と断っていただければ、その部分はオフレコにいたします。

それでは、田中さん、今日は我々の仲間としての第1回の参加ですが、このクアラルンプール会議をどのように見ておられるのか、コメントをお願いいたします。

(3) コメンテーター：田中 均(前外務審議官)

田中 均 どうも、田中です。よろしくお願いします。

高田審議官、山田課長がご報告されたこと、政府、外務省でも非常に努力をしていただいた結果だと思えます。基本的には、私は、今回の2つの会合はバランスがとれて、今後に向けての1つの大きなステップとなったと思えます。中国との主導権争い的なことが報じられていますけれども、それはあったんでしょう、あったんだけど、それが問題の本質ではないということだと思えます。

それで、山田課長が言われたこと、要するに、私がまだ外務省にいたときからのことですが、東アジア共同体とか東アジア・サミットという問題について、どういうふうに取り組むかということなんですが、1つは、日本の経済とか日本の将来の経済の実態を見たときに、この東アジアでより大きな統合されたマーケットをつくっておいたほうがいいということと、もう一つは、これは政治的になんですが、やっぱり中国が将来どういう政策をとるのか不透明だし、中国の動きというのをチェックしなければいけない。それをチェックするために、最も好ましい仕組みというのはどういうことなんだろうかと、多分2つの問題意識があったように思うんですね。

したがって、東アジア・サミットということに限定して言えば、当初、もともとの案というのは、ASEANプラス3の中で、ASEANと+3というのを対等な立場で考えましょうということだった。したがって、ASEAN地域以外で主催をしてやりましょうという話だったんですね、もともとの発想の原点というのは、それに対して中国が先に手を挙げて、いや、自分たちのところで東アジア・サミットを開催したいという動きが出てきたということなんですね。それに対して、さっき山田課長が言われたように、日本というのは、開催地をどこにするかというようなことで争いをするのではなくて、知的な貢献をすると。知的に具体的なコンセプトをつくることによって、知的にリードしていきましょうということが多分省内の結論だったと思うんですね。ですから、それに従って、アジア局の中で何回もコンセプトペーパーをつくり、ASEANに主導権をとらせるような形で物事をつくっていったということだと思えます。

その原点であったのは、例えばASEANプラス3と、東アジア・サミットというのは、きちんと外に向かって説明ができるような差異を持ったものでなければいけないということと、それから、さっき言われた原則的なこと、透明で、インクルーシブで、価値というものについても含まれたものでなければいけないと。それから、ASEANがドライバースシートに座るべきであると。最後の点は、要するに植民地経験を持つ人たちですから、彼らを阻害することによって、東アジアというのは非常にいびつな形になってしまう。大国が主導権をとると、東アジアが全体としてうまく進んでいかないという懸念があるので、相対的に力の弱いASEANが主導権をとる形にすると

ということが大変大事なことである。それを考えたときに、もともと出てきたのは2ティアアプローチだったんですね。ASEANプラス3がコアとして、東アジアの共同体づくりに中核的な役割、それから、そこにASEANプラス3プラス、もとは豪州、ニュージーランドだけだったんですが、そういう拡大セッションを設けることによってバランスを保っていく。やっぱり民主主義国のバランスというものを全体の共同体づくりの中に入れていくということであったので、結果的に今度のASEANプラス3、並びに東アジア・サミットで合意され、外に発表されたことというのは、この考え方に近い結果になっているという意味で、日本の知的な貢献が成果を上げたと言えるのではないかと思います。したがって、この結果自身については評価をされるべきことであるというふうに思うんです。

ただ、2つ考えるべきことがあるんじゃないかと思うんです。最初の点は、これはむしろ組織論というか、今後の東アジア・サミットの考え方ということだと思うんですが、私は、やっぱりロシアを入れるということについては相当大きな懸念を感じざるを得ないんです。確かにASEANがつくったクライテリア、TACに加入しているとか、ASEANと実質的な関係を有するとか、正式な対話国であるということがありますが、実はそのロシアは参加の要件を満たし得る国なんですね。ですから、ロシアが入ってくるのを防ぐのは、常識的に考えて難しいかもしれないという気がするんですね。

ロシアが入ると、2つの意味で問題が出てくるというふうに私は思う。1つは、やっぱり明らかに米国との関係である。そんなことを言えば、米国がTACに加入すればいいじゃないかという議論はあり得ると思うんだけど、米国のことを考えると、米国がTACに加入するということはおそらく考えられないことだと思う。米国という大国のことを考えると、TACに入って東アジア・サミットに入ってくるというような姿勢を示すということは多分あり得ないのではないかと。そうすると、やっぱりこの東アジア・サミットというのが非常にいびつなものになってしまう。ロシアが東アジア・サミットの一員として、東アジア共同体についても役割を果たしていくというのは、ちょっと私は考えられない。要するに、ロシアという国は東アジアだけに面した国ではない。やっぱりヨーロッパの一員、ヨーロッパでも若干阻害されているという今の状況の中で、これを東アジアに取り込むというのは相当慎重でなければいけない。それから、副次的な効果として、アメリカを結果的に阻害してしまう。これは、相当私は深刻な懸念を持つべきと思うんですね。だから、このロシアの問題をどういうふうにハンドリングしていくかということは、単純にロシアがクライテリアを満たしているか否かということを超えて、かなり将来の東アジア協力、あるいは共同体づくりということについて問題が出てくるのではないかと。この点については、よく外務省の中でも検討をされることを希望したいというふうに思います。

それから、もう一つは、これがより本質的な問題なんですけれども、我々日本がどれだけ東アジア共同体づくりにコミットをしているのかという問題なんですね。もし、日本の国論として、東アジア共同体をつくるのが日本の国益を担保していく上で好ましい、その場合にも、私は、東アジア共同体づくりのプロセスを通じて問題を解決していくということ、それで、当面できるのは経済共同体的なものだという認識というのは十分持つべきだと思いますが、仮にその2つの認識を政府、国家として持てたとして、すなわち1つは、東アジア共同体というものをつくっていくのが日

本の利益で、かつ、そのつくるプロセスにおいて、今ある東アジアの問題を解決していくんだと。結果的にできるものは経済共同体なんだけれども、将来的には価値というものについても目指すということによって、中国とかほかの国を、より政治的な改革とかいうことを推し進めていくといったようなことについて日本国内のコンセンサスが出るのなら、私は、具体的なことについて、日本は相当積極的に旗を振るべきではないかと思います。私は三つのことが重要だと思います。第一に今の経済連携協定を面にしていくこと、韓国とか中国との自由貿易協定ということにもなるかもしれませんが、そういう経済連携協定をマルチにするということについて真剣に考えていく。

それから、第二にヒューマンセキュリティというんですか、鳥インフルエンザとかそういうことについて、今回、日本が旗を振ったということは非常に好ましいことだったと思うんですがそういう東アジアにあるヒューマンセキュリティの諸問題、エイズとかそういうものを、具体的に進めていくコンセプトをつくっていくことですね。第三に東アジアの格差の是正。これについては援助の世界だと思いますが、相当やっぱり大規模にCLMVと言われる国々に積極的に協力を進める、あるいはそういうファシリティーを考える、そういうことをやっていくべきではないかというふうに思うんですね。

これから来年のサミット、そして2007年には第2共同宣言をつくるということになっているわけで、日本が主導権をとっていくべきでしょう。多分、来年のフィリピンのサミットにおいては、ロシアの加入というのが具体的に課題になる。それまでに、日本が合理的な、かつ具体的な動きを進めることがないと、ロシアが入る入らないということだけで来年議論をすることになり、これは好ましくない。日本として何をどうしたいかということについて、積極的に構想をつくって打って出る時期に来ているんじゃないかというふうに思うんですね、私は。

ただ、これは、果たしてそういう東アジア共同体的なものを推進していくという、国論みたいなものが明確にあるということが前提だと思うんですが、そういうものがなければ、あとはもうこの地域で、ジオポリティカルな観点からいろんなアライアンスをつくりつつ、米国との関係を中心にしつつやっていくということになる。私は明らかに前者であるというふうに思いますが、それはこういう評議会でも十分議論していただいてやっていくべき話ではないかというふうに思います。

それから、これは先ほど高田君が言われたことではあるけれども、米国との関係はきちんと説明をしておいていただく。相手はあんまり関心がないかもしれないですね、アメリカがね。わかりません、僕には。だけど、ただ、しつこくしつこくインフォームをし、意見を聞くというプロセスをきちんとつくっていく。レギュラーにつくっていく。そういうことを通じて、アメリカのこういう東アジア・サミットとのリンケージをつくるのは、私は日本の役割だというふうに思います。

以上です。

(4) 自由討論

伊藤憲一 どうもありがとうございました。

では、冒頭質問みたいなことになりますけれども、ずっと報道を追っていて、奇異な感じを受けたのは、急にロシアの話が出てきて、しかも、プーチンにEASでの冒頭スピーチも許すというよ

うな動きになったことなんです。一体どこがロシアをそんなに推進したのかが知りたいんですね。

もし中国だとすると、私はこういうことなのかなと思ったりしたのですが、ロシアというのは実質的にはやっぱりヨーロッパの国で、ウラル山脈の向こうの部分が本体ですよ。これが入るということは、結局、E A Sのほうでは東アジア共同体というのは無理だということになっていくわけで、ましてやその後、E Uも入るとか、アメリカが入るなんていったら、これはもう地理的共同体としての空中分解ですから、結果的にやっぱりA S E A Nプラス3しかないんだということがねらいで、この際、ロシアであれ、あるいはE Uであれ、もう押し込めるものは全部押し込めて自爆させようという戦略でロシアの話が出てきたのかなと思っていたんですが、そうなのかどうか。そうでないとすると、ほんとうにロシアを入れて東アジア共同体なんていうことをだれが推進しているのか。A S E A Nプラス3より広げることに反対だという人が、ロシアも入れよ、E Uも入れよと言っている魂胆を知りたいなということです。

私自身は、A S E A Nプラス3というのにも無理があると思うんですね。というのは、人口20億のうち、1国が13億を占めるという構成で地域共同体というのはやっぱり無理があると思うんですね。その13億の国が非常に寛容な国で、ゆとりがあり、譲るべきときはかなり譲るといふ国だったらまた別ですけど、現実はその逆なわけですから、中国を含んだ20億の共同体というのはいろんな意味で無理がある。結果的には、やっぱり中華冊封体制の現代版になりかねないと思うんですね。ですから、そういう目で見ると、私は、今度のインド、オーストラリア、ニュージーランドを入れた領域というのは、地図で見ると結構よくまとまっているんですね。いいんじゃないかなと。いいところに日本外交、なかなかやったなと思ったりしていたんですが、そのあたりのことについてお答えいただければと思います。

高田稔久 私が承知している範囲では、ロシアの問題というのは、まずはロシアありきだろうと思っております。ちょっといろいろ裏の話は……。

3カ国の参加というのが決まった後、夏ぐらいだったろうと思いますけれども、ロシアとA S E A Nの首脳会議があるというようなことを伺って、それで、東アジア首脳会議にも入りたいということロシアはずっと積極的に、かつ、しつこいくらいにA S E A N各国に働きかけをしていたと思っています。それで、一たんは9月にA S E A Nがニューヨークで、国連総会の場で外相会合をやって、そのときに明確に決まったのか、何となくその場の雰囲気なのか、A S E A Nの3条件のうち、T A C、それからダイアローグパートナーであるというところは、これは何の問題もないわけですけども、実質的な関係というところで消極論もあり、A S E A Nとしてのコンセンサスはできないけど、むしろ、少なくとも今年入るということについては消極的。しかし、その後、ロシアは、議長国マレーシアのみならず、各国に非常に強力に呼びかけをしていたと。

ロシアの意図としてどういうことがあるのかですけども、いずれにしても、まずは入っているいろいろやりたいということだと思いますけれども。そうすると、A S E A N各国との構図で、ロシアの参加ということを見ますと、例えばベトナムなんていうのは、先ほどの関係からいって、例えばノーと言わない国はかなりあると思います。それで、これ、直前までどういうアレンジになるかというのはわからなかったんですけども、当然、マレーシアとしてはそういう全体のサブの話、そ

れから、これもASEANウェーの1つだと思いますけれども、やはり実際に客、特に大国の客がその場において、メンツをどうするかというようなことである。いろいろ考えた末に、前の日の食事に、これは何の食事ということではないんですけれども、その場におられる首脳たちとの食事ということで昼食、そこから、ガラディナーということで出たのに加えて、ゲスト、議長国のゲストと。これはOICが何かでもそういう例があるんですかね、どこかでそういう似たような例があったのをマレーシアが思い出してやったと。議長国のゲストということであれば、それについてまでどこかの国が強く反対は、やっぱりなかなか流れといたしますか、場の雰囲気できないものですから、そういうことになったということでございます。

ちょっと裏の話をしますと、また議長声明等をめぐっているんな動きがあったと申しましたけど、そのうちの1つは、もうこれは認めてしまおうやというようなこともあったんですけれども、そこはやはりまだコンセンサスがないということで少し押しとどめ、最後の段階で押しとどめて、これは我が国だけではなくて、ASEANの幾つかの国も慎重論でございます。今後検討していくということになっていくと思います。ほかの国が、例えば中国あたりがどのくらいの、どういう意見をもとにどう動いたというあたりは、実はこれは今、議長がおっしゃられたようなことが、ちょっとその辺については確たる情報といたしますか、そういうことは持ち合わせておりません。

伊藤憲一 中国と日本がそれについて、事前の段階で何か発言したかしないかというのは。

山田滝雄 平場ではその話はやっていないものですから、積極的に議論を交わし合ったということはないんですけれども、おおよその経緯は説明があったとおりです。少し補足しますと、東アジア・サミットの開催が決まる前から、ロシアとASEANの初めての首脳会議を今年初めてやってみようという話が実はありました。ですから、別に東アジア・サミットがあるからこの話が出てきたということではなくて、こういう流れというのは、ある面では偶然の産物なんです。

しかし、今後はロシアの参加問題について、おそらくいろんな国がいろんな思惑を持っているんでしょうから、議長が言われたような側面というものは、一概に否定はできないところはあると思います。それをどういうふうに評価して、今後、我々としてどう対応していくのか、十分慎重に考えていきたいと思います。特に、この問題については、戦略的にも大きなインプリケーションがあって、その様な面を含めて対応を考えることが重要です。

伊藤憲一 確かにロシアが入ってくるかこないかというのは、非常に大きなインプリケーションがある問題だと思うんですね。ですから、一部の国の軽率な動きで流れがつかられ、雰囲気がつくれられ、それにあおられて、日本は何も言えずに認めちゃったというようなことになるんじゃないかと、ここは、場合によっては、日本一国がロシアの恨みを買っても、立ちふさがって、慎重に時間をかけた検討を求めるという場面が必要になる可能性もあるんじゃないか。そして、それでこそ日本の存在感というものが改めて世界から認識されるということであって、その場合、やはりこれは二国間の問題でありますけれども、ロシアが北方領土問題についてああいう態度をとって、二国間関係が全くぎくしゃくしている、展望もないという状況のまま、東アジア共同体を一緒につくりましょうということになるのかという別の日本の方針というのも、これはぜひご留意いただきたいファクターかなと思うわけです。

それでは、田久保さん。

田久保忠衛 ロシアの問題なんですが、伊藤さんが言われたので。

1つは、入るとしたらどういう資格になるのか。入るか入らないかまだ決まっていなわけですね。もしも入るとしたならば、ASEANプラス3の国が増えるのか、あるいは+3+3のところに入るのか、あるいは3+3+1に、オブザーバーみたいになるのか。これ、非常に私も気になります。田中さんが深刻な懸念を持つといわれました。田中さんの言動を僕は批判してきたのだけれども、今日はほんとうに懸念を共有しました。

2番目は、田中さんが言われた、プロセスを通じて経済共同体になればいいんだと、こっちの方向だということ、これは私もかなり納得できる。この日本の方針は、方向性としては確たるものなのかどうかということなんです。

3番目、田中さんは、アメリカとこのASEANプラス3のリンケージとおっしゃった。

田中 均 東アジアのね。

田久保忠衛 東アジアのね。このリンケージというのは大いに私、結構だと思うんだけど、ここで、アメリカとのリンケージは何がリンケージになるか、何が橋なのかというと、普遍的価値観だと思うんですよ。せっかくインド、ニュージーランド、豪州が入ったので、しかも、ブッシュが日本に来たときに、京都演説では「自由」とか「民主主義」という表現を79回、産経は78回とあって、ほかの新聞には80回というのもあります。これは、ブッシュの第2期の就任演説、あれはウィリアム・サファイアが勘定したんだけど49回。さらにブッシュはモンゴルのウランバートルで素晴らしい演説をしたのです。どういうものかということ、一党独裁に反対する演説なんですよ。15年前にモンゴルはよく一党独裁と戦ったと。そこで、ハンガーストをやった若い民主主義者の一人がここにいらっしゃる内閣総理大臣閣下でありますという、これは満場の拍手を得た。北京への警告です。こういう大きな文脈からすると、日本はこの普遍的価値観を少し強調するぐらいに強調なさったほうが、これはリンケージの役を果たすのではないかと思うが、これはいかがでしょうか、こういう質問でございます。

伊藤憲一 じゃ、吉田さん。

吉田春樹 まず、OBの田中さんを含めてですが、外務省の皆さん、大変ご苦心なさり、かつご尽力なさったということで、心から敬意を表したいと思います。

ただ、私、実は経済共同体を強く推している立場でございまして、その立場で、第一歩を踏み出さなかったと申し上げると大変失礼になりますが、非常に小さな小さな第一歩でしかなかったというふうに考えているということを一言申し上げておきたいと思います。

私が考えております経済共同体、ここでくだくだお話をするつもりはありませんが、一言で言えば、やはり関税同盟、それから、東アジア通貨、これは地域の基軸通貨になるものですが、共通通貨、ないしはその先の単一通貨まで展望をするということで考えておりまして、これは、先ほど伊藤さんから20億人という話が出ましたが、実態的に既に経済圏ができ上がっているという意味で、ASEANプラス3しかないというふうに考えているわけなんです。

例えば、1つだけ例を申し上げると、私は、日本の農業はもっと改革を進めるべきだとは思いますが、日本だけでなく東アジアの各国にとってみて、オーストラリアとのFTAは絶対考えられないというふうに思って、遠い将来は別ですが、足元では考えられないというふうに思っています。

それでは、東アジア共同体ができなかったらどうなるかといいますと、この東アジア地域に、私は、多分秩序のない巨大な華人経済圏、これはASEANの華人社会を含め、かつ、将来的には台湾も含め、そして、中国を中心にして大変巨大な経済圏ができる、無秩序である。日本は、例えば原子力発電の安全確保の問題ですとか、それから、大陸で発生する産業公害ですとか、そういう問題について、個別イシューとして、中国のみならず韓国や台湾、あるいはその他の国といろいろ話し合わなきゃいけない、そんな力がほんとうに日本にあるんですかと、こういう考え方を持っていました。したがって、ぜひ共同体でなければならぬが、そういう目標に向かっては、ほんの小さな一歩でしかなかったと、こういうふうに評価しています。ご参考にしていただければというふうに思います。

伊藤憲一 いま羽田総理がいらっしゃいました。じゃ、畠山さん、どうぞ。

畠山 襄 いろいろお疲れさまでした。1つのコメントですが、ASEANプラス3でやるのは中国で、東アジア・サミットでやるのが日本というふうに何となく報道されたわけですが、そういう面も少しあったのかもしれませんが、ASEANプラス3でやるほうは中国だというふうにならないように、今の吉田さんの発言とも関係しているかもしれませんが、あれも日本のものだと言わんばかりの態度で、両てんびんかけておいていただいたほうがいいと思います。間違ってもあれは中国のものというふうにならないようお願いしたい。

なぜそう言うかという、大ざっぱに言えば東アジア共同体問題は、ASEANプラス3でしかやらないということでもう勝負はあったと思うんですね。今のロシアの問題もありますし、東アジア・サミットの方はトークショッポになってくると思います。ロシアなんかが入って稀釈されちゃう。だから、この今回の表現でもわかるように、「ASEANプラス3」のほうでは東アジア共同体ときちんと書いてあって、「東アジア・サミット」のほうでは単なるcommunity buildingとしか書いていない。community building一般ということですよ。このことからわかるように、勝負があったと思うんですね。仮に勝負が今回つかなかったにしても、今後ついていく。したがって、ASEANプラス3も日本は大事というポジションをとっていただいたほうがいいと思います。それが第1点。

第2点は、universally recognized values、これを入れたのは非常なご功績だと思いますね。質問ですが、これに対して中国はどのような議論をしたんですか。中国はどのような思いでuniversally recognized valuesをシェアしていると思っているのか、そこをちょっと議論がありましたら御紹介下さい。

それから、3点目は、山田さんの「機能論もさることながらそろそろ戦略論で」という話に全面的に賛成でありまして、もともとFTAなどの機能論だけで共同体というのは、それ自体、論理矛盾みたいなのところもありますので、大いにその方向でやっていただきたい。

最後に、経済共同体的なものだろうと田中さんは言われましたけど、なぜ共同体なのか。なぜ自由貿易協定どまりじゃいけないのかということをご考えておられるのかということが質問です。ちなみに、吉田さんは関税同盟と言われましたが、関税同盟は、この間も申し上げましたけど、いまや死語になっているんですよ。ASEAN、なにかずくシンガポールみたいに関税がゼロの国ができちゃって、関税同盟をつくろうとすると他の国に合わせて引き上げなくちゃいけないわけです。

そういう関税が極めて低い国は日本も含めていくつかあるので、それらの国は引き上げて代償を払わざるをえない制度になっている。そんなことを実施する国は出てこないの、関税同盟というのは今後あり得ない。コメントですけど、以上です。

伊藤憲一 どうもありがとうございました。

じゃ、山下さん。

山下英次 吉田春樹さんは、かなり外交辞令がはいっていると思いますが、スモール・ステップだとおっしゃったんですけども、私はオフ・トラック（道を踏み外した）という感じです。要するに、はっきり申し上げると、日本は余計なことをしたと思います。東アジア共同体の推進は、「ASEANプラス3」の枠組みで良いのだということです。だから、そういう意味では、中国とマレーシアの主張の方が正しかったということなのです。山田滝雄課長も先ほどおっしゃいましたが、アジアのアイデンティティーが難しいといいながら、日本がオーストラリアやニュージーランドを、東アジア・サミットに入れるという提案をすることは何かということなのです。

要するに、わが国は、アメリカのロジックに従って行動しているということではないわけです。つまり、アメリカはアジアを分断支配したいと考えていると思いますが、日本はそれに乗ってしまったということだと思います。アジアの分断に貢献するように、日本は、道を踏み外してしまったということですね。その結果、またしてもアジア諸国との間に亀裂を作ってしまった。だから、今後いずれ元に戻らなきゃいけない、「ASEANプラス3」に戻らなきゃいけないということです。

東アジア・サミットの方は、現在APECがもう死に体になりつつあるように、今後おそらく形骸化していくことでしょう。山澤逸平先生に怒られるかもしれませんが、私は何年も前から、APECは安楽死させるべきであるといい続けてきたわけですけども、いま現実にその通りになっているわけです。私は、東アジア・サミットの方もそういう運命にあるのではないかと思います。私は、サミット直前の1週間ほどクアラルンプールに滞在し、マレーシアの政府やその関連機関の幹部と懇談する機会がありましたが、彼らの受け止め方は、私が事前に想像した通り、東アジア・サミットは、討論のための単なるフォーラムであって、本質ではないということです。東アジア・サミットには、バリ条約さえ締結すれば、アメリカでもロシアでもどの国でも参加できるのですから。そして、東アジア地域の戦略的枠組みは、あくまでも「ASEANプラス3」の方であるということです。これは、アジアとして、誠に賢明な判断です。

あと、もう一つ申し上げたいのは、2002年1月の小泉首相のシンガポール演説というのがありますが、私は、世界の19カ国・地域の新聞・雑誌、計28紙・誌（うちアジアのメディアは12カ国・地域の計17紙・誌）について、小泉演説を実際にどのように報道し、評価したのかについて評価して論文にまとめたことがあります。それによりますと、結局、2000年11月に中国の朱鎔基首相がASEANに対して行った提案を下回っているということです。つまり、小泉演説は、朱鎔基さんの二番煎じだったというのが彼らの評価なのです。あと、もう一つ重大なのは、アメリカが反対したため、1990年のマハティールのEAE C構想に、日本は参加を表明できず、計画は頓挫しました。1997年のAMF構想の時も、アメリカの反対に遭い、結局、日本は降りてしまいました。つまり、日本は、2度アジアを裏切っているわけです。したがって、日本はアジア諸国から3度目の正直を求められていましたが、小泉演説では、東アジア共同体に、オセアニア

を入れるべきと提案してしまったのです。これも、小泉演説に対してアジア諸国のメディアが失望理由のひとつです。それにもかかわらず、今度、またオフ・トラックして、「2度あることは3度ある」式の対応をするような方向に踏み出てしまったと私は考えますので、非常に残念なわけです。

ただし、田中均前外務審議官は、先ほど日本の進むべき道として、2つあると言っておられました。ひとつは、従来通りアメリカについていくという道と、もうひとつは、アジアの地域統合を日本が積極的に推進するという道であり、田中さんは、明らかにその後者の方だとおっしゃいました。しかし、国論がなかなかそうならないと……。それは、ちょっと意外だったんですけども、私がかねてよりそれが日本の進むべき道だと思っておりますので、大変心強く感じました。つまり、関税同盟とかそういうことよりも、結局、「アジアの脱ドル」、日本を含めた「アジアの脱ドル」が必要なんだということなのです。そのために、日本とアジアは、地域統合をする必要があるのです。それがわかっているならば、東アジア・サミットに他の地域、すなわちオセアニア諸国を入れるというような発想は出てこないだろうと思うのですが……。

そんなわけで、大変僭越ではありますが、山田課長のお話を拝聴しておりまして感じましたのは、私に一度、外務省アジア大洋州課で、日本とアジアが地域統合を必要とする経済的が何であるのかについてレクチャーさせていただきたいという強い誘惑に駆られました。

伊藤憲一 どうもありがとうございました。

じゃ、富山さん。

富山 泰 時事通信の富山と申します。今回初めて参加させていただきました。よろしくお願いいたします。

アメリカの参加問題について、ちょっと教えていただきたい点があります。私の知る限り、この東アジア・サミットに関して、アメリカの政府当局者、あるいは元当局者、あるいはシンクタンクの間、そういう人たちがしゃべったり書いたりしたものを見ていますと、2つの対応が提示されていて、1つは、日本とかオーストラリアとか、アメリカの息のかかったといいますが、アメリカの仲間の国家を通じて、アメリカが無視されないようにするというアプローチが1つ。もう一つは、APECを再活性化させて、東アジア・サミットを、言葉は悪いかもしれませんが、骨抜きにしてしまおうという考え方も提示されていたと思います。それで、アメリカ自身が東アジア・サミット、あるいは共同体に入りたいとか、入るべきだとか、そういう論調はあまり見たことがないんですが、外務省の方に、アメリカから今まで参加の希望表明とか、あるいは逆に希望しないというはっきりした表明とか、そういうのがこれまでの接触の過程であったのかどうか。そして、今あるメンバー、中国、ASEAN、そして日本ももちろんですけども、こういう今のメンバーたちはアメリカの参加問題に対してどういう考えを持っているのか、そこら辺を教えていただきたいと思います。

伊藤憲一 どうもありがとうございました。

じゃ、田島さん。

田島高志 4点ありますが、第1点は、今、3人の方々から明確なご説明がありましたが、多くの不確定要素や不透明な点のある中で、2ティアというアプローチを、現在置かれた条件下で、非常にうまくマネージされ大変重要な成果を挙げられたと思います。最後に田中前外務審議官が言わ

れた、将来に向けての戦略的な考え方、枠組みは特に重要であったと思います。これらの意味でご活躍を高く評価させて頂きたいと思います。

第2点は、東アジア・サミットをつくって、豪州、ニュージーランド、インドを入れた点について、ASEANプラス3だけですと先進国が日本だけですし、共通の価値観などを重要視していくためには、豪州、ニュージーランドも入れた枠組を考え出したことに大きな意義があったと思います。それから、インドを入れたことは、今、成長株の国ですし、中国の問題を考えたときに、中国と並んでこれから伸びていく国ということで、チェック・アンド・バランスの役割をインドには多少は果たしてもらえらる感じがしますので、そういう戦略的な観点から意味があったと思います。

3番目、これは先ほどから大きな議論がなされましたように、ロシアの問題ですね。私は、議長がおっしゃった点にほぼ全面的に賛成で、日本としては、この問題は非常に慎重に取り扱う必要があると思います。ロシアは入れるべきではないと感じます。それはいろんな理由からですが、それについては既に伊藤さんも言われましたし、田中外務審議官も触れられましたが、もし、どうしても入れざるを得なくなった場合でも、せいぜいオブザーバーとして参加させる、かつその場合には、アメリカも並んでオブザーバーに誘い入れるというぐらいを落としどころに持っていくようにすべきじゃないかと思います。

そのためには、アセアン諸国には入れることを支持する国が数の上では多いようではありますけれども、反対の国、慎重な国もかなりあると思います。例えばシンガポールとかインドネシアとか。フィリピンは中くらいかもしれませんが、シンガポールなどは非常に現実的で冷静ですから、そういう国とまず相談をする、先ほどアメリカとまず話し合っただけということと言われましたけど、むしろ域内の国の中で、シンガポールなどとよく相談をして、これからの反対を実現する戦術を慎重に検討していくべきではないかと思います。

これは、さっき伊藤さんも言われたように、北方領土問題を抱えているロシアを入れるなどということは感情的な問題じゃなくて、実際上の日本の国益の観点からの問題です。ロシアは、ソ連の時代からアジアと共同体をつくりたいとか、経済関係のコミュニティーをつくりたいとかの提案をよくやってきたんです。それは中国を牽制する意味もあったし、日本を牽制する意味もあったし、そういう戦略的な考えが伝統的にあるんですね。太平洋に乗り出す道を探るためにいろんな提案をソ連時代から出してきていますから、その流れをくんでいるわけです。いずれにせよ、ヨーロッパが中心のロシアを入れることは全く合理性がないと思いますから、単にTACに参加しているなどの形式的技術的な要件だけで認めるべき筋合いのものではないと思います。戦略的な観点から、日本は絶対に反対すべきであると思います。ただ、反対の理由づけは、論理性のある理由をきちんと整えて、感情的な反発をなるべく避けるように、巧みに行動する必要があると思います。

4番目は質問ですが、先ほどちょっと畠山さんも触れられましたけれども、ASEANプラス3サミットの宣言の中ではan East Asian communityと書かれていますが、東アジア・サミットの宣言の方では、community buildingとだけしか書いてないんですね。それは、East Asiaという語はもうサミットの題名についているからという単純な理由からつけなかったのでしょうか。あるいは何か背景があったのか、つけようという議論はなかったのか、その点をお聞きしたいと思います。

伊藤憲一 どうもありがとうございました。

じゃ、進藤さん。

進藤榮一 最初に、外務省が大変ご苦勞なされたことに対して高く評価し、かつ感謝申し上げます。

その上で、どうやらお話を伺っていますと、ASEANプラス3と東アジア・サミットという2つの選択肢が出てきているのかなというふうに、しかも、あれかこれかではなくて、デュアル・プロセスの形をとって出てきているように拝聴しました。

2つ目。お伺いしていると、結局、さっき畠山さんがおっしゃったように、もう機能的な形としては、東アジア共同体構想はやっていけなくなったという現実に我々は今直面しているんじゃないかということも私も感じました。戦略的な選択をこれからどうやっていくのかということです。では、戦略的選択とは何なのか。私は、東アジア・サミットの近未来というのは、すでにインド、ニュージーランド、オーストラリアが入っている上に、プラスロシアが入り、これからEUも入ってくるかもしれません。その時にはAPECと同じようにトークショップにやはりなっていくと思うんですね。そのときにASEANプラス3+1という、例えばインドを組み込むことによって、日本の戦略的なてこを手にする道があるんじゃないかという感じを直感的に感じます。これは中国に対する牽制でもあるし、しかも、中国はインドと密接な関係を持っている。この道はおそらく、ASEANプラス3と東アジア・サミットの間接、第3の道として、これから浮上してくるんじゃないかなという感じを持ちます。だから、むしろ日本はその道を選択する方向で、外交交渉を進め戦略関係をつくっていくということも考えられるんじゃないかなと痛感しました。

経済的な関係では、インドは今後非常に成長する国です。これからますます日本との関係が強くなっていくでしょうし、日本のODA最大対象国の1つです。それから、インドは日本に対して東アジア共同体へと参画を非常に働きかけていますし、アイデンティティーという点では、ロシアと違ってインドはまちがいにアジアの国です。しかも、農業問題に関して、ニュージーランド、オーストラリアのようなケアンズ・グループとは違って日本との協調性を持っているはずで、この辺を少しお考えになっていただいたらなというふうに思うんですが、あわせてご意見をお伺いしたいと思います。

伊藤憲一 どうもありがとうございました。

じゃ、柿沢さん。

柿沢弘治 私は発言しないでおこうかと思ったんです。今回の東アジア・サミットでは、さまざまな悪条件、制約条件の中で、高田審議官や山田課長が努力をされたことは評価をいたします。しかし12月14日というのは、東アジア・サミットの誕生日であると同時に葬式の日だったんじゃないか、というのが私の率直な感想です。というのは、やはり“東アジア”サミットという以上は東アジアの13カ国、つまり10+3でやるべきであったと思います。さっき畠山さんから「それを中国の占有物にしちゃいけない」という話がありました。でもオーストラリア、ニュージーランド、インドを入れたことによって、実は今回のサミットが、東アジア共同体組織、共同体組織を作るためのフレームワークとしては、ほとんど機能しなくなったと思うんです。ましてや、次回からロシアが入れば、それは共同体組織をつくるための会合ではなくて、ただの“おしゃべり会”になる。今のAPECになってしまう。

田島さんは領土問題が未解決なので、ロシアを入れるべきでないという話がありました。私は思いつくです。ちょうど私が外務政務次官のときに、G7をG8にしようという意見がヨーロッパから出て、日本は抵抗したわけです。松永大使が各国を回られたし、有馬さんも回られた。しかし、結局は入っちゃった。領土問題が解決していないのに入っちゃったんですから、何故G8には入れたのにこちらには入れないのは、非常に難しい。そうするとAPEC以上に漠然としたものになってしまう。

だとすると、APECよりも悪い姿になると思うんですね。APECマイナス台湾というのが今度の10+6の構造だと思うのです。これが10+7になり、ほかにバングラデシュが入ってくるかもしれません。インドが入っているんだったら、バングラデシュを入れない理由はない。台湾を除いた地域的なフレームワークがアジアにできることは、日本の国益から見て望ましくない。その意味では、APECのほうを大事にすべきであって、この10+6か7か8か知らないけれども、これはアプリーシエートできない。むしろ、これを意味のないものにしていくことが大事です。APECにはアメリカも入ってるし、民主主義国家のアライアンスという意味で言えば、APECのほう望ましい。中途半端な10+7というのは不要であり、無用論です。だから、今回は誕生日であると同時に葬式。死んだとまでは必ずしも言えないけれども、救命装置をつけた植物人間。ジャーナリストに言えばそうなるのではないか。

それから、今度の東アジア・サミットとASEANプラス3の折に、日中韓の首脳会談ができなかったことの問題点を考えなきゃいけない。そこのところが、阻害要因の1つなんです。どうせ来年9月にこれはなくなるよと思っているかもしれませんが、本当に阻害要因はなくなるのか。ポスト小泉如何によりますがそう簡単になくならないかもしれません。日本の世論も非常にあおられてきていますから、「靖国参拝の何が悪い」という雰囲気傾きつつある。そういう意味では、日中韓の北東アジアの協力関係が弱体化した形になっていくことは、日本にとって足元を固められないで、常任理事国をねらったときと同じで、これからの発言権は低下せざるを得ないだろうと思うので、繰り返しますけれども、12月14日は誕生日であると同時に葬式という印象を持っています。

ですから、もう一度10+3に戻って、インドやオーストラリアやニュージーランドの力をかりなくたって、日本一国で自由と民主主義と普遍的価値を唱え続け、10+3の中に同調者を作っていくという気概を持って欲しい。我々一国では中国と対抗できないので、オーストラリアやニュージーランドを入れてバランスをとろうというのは、外交的には一つの選択肢かもしれませんが、何か弱気で気概がない外交だという気がします。

やはりもう一回初心に戻って、東アジア共同体というのを組織化していくためにはどうしたらいいかを考えるべきです。いろんな方が機能的アプローチということを言っていますが、機能的アプローチであるなら、APECで十分なんじゃないかと思います。以上、東アジア共同体の夢を長く追い求めてきた者としては、非常に失望したということです。

伊藤憲一 大変貴重なご意見、ありがとうございます。

それじゃ、山澤先生。

山澤逸平 短い質問です。ASEANプラス3と東アジア・サミット、この2つが今後どうなるかに皆さんが関心を持っています。これについての情報をいただきたい。どちらの会議にしる、先

ほどのご説明だと、2時間から3時間程度の会議ですから、首脳会議そのものではそんなに大きな動きがなさそうですが、要は下で支える実務者協議、これがどう進んでくるかということなんだろうと思います。A S E A Nプラス3のほうは、既に8年の経験があって、今までそれを積み重ねてきたわけですね。東アジア・サミットのほうの実務者会合は、今後どういう予定になっているんでしょうか。

伊藤憲一 非常に大事なところですね。

それじゃ、浅見さん。

浅見唯弘 外務省の皆さんの大変なご尽力で、A S E A Nプラス3とE A Sの2つの会合というのはバランスのとれた会合になったんじゃないかなと思います。この共同宣言を拝見すると、East Asia Summitで一番私が価値がある言葉はuniversally recognized valuesだと思うんですね。おそらくE A Sだからこれを挿入できた。A S E A Nプラス3だとこういう言葉が受け容れられたかどうか、ちょっと外から見ていますと難しかったんだろうなという感じがします。それがE A Sで実現できた、だから大変なバリューがあると思います。

一方、A S E A Nプラス3は今回の会合で、共同体を構築していくメインビークルであると定義づけられました。これは非常に重要で、その意味するところは、共同体の構築はE A SじゃなくてA S E A Nプラス3だということをここにはっきり言っているんだろうと思いますね。さらに、主文の2に2007年の話が出ていまして、それまでの準備期間を置いて、2007年に共同体の将来の方向性を議論することになっています。つまり、共同体構築の主たる役割をA S E A Nプラス3が担い、かつ、2年後にその方向性をつけるんだということを言い、かつ、E A Sがそのビークルを使ってuniversally recognized valuesのことをうたっているのです。したがって、2年後には、日本がE A Sをバックとして、バリューの議論をA S E A Nプラス3で議論できるという下地をついたんじゃないかという感じが私はするんです。これは大成功じゃないかなというふうに思うし、その意味で、先ほど畠山さんがおっしゃった、本当にA S E A Nプラス3を大事にする必要があると考えます。その場で日本は、E A Sのこの成果をうまく使ってバリューの議論をしながら、共同体の方向づけができるもっとも重要な立場に立っているという気がするんですよ。それが私の感想でございます。

伊藤憲一 どうもありがとうございました。

それじゃ、大江さん。

大江志伸 ジャーナリストの立場から質問と若干の意見を述べたいと思います。

質問は、東アジア・サミットへのインド参加についてです。日本外務省の方々は、「日本の貢献が非常に大きかった」と自画自賛していますが、A S E A Nの国々にも、インド参加を強く望んだ国が結構あったのではないのでしょうか。必ずしも「日本の貢献」ばかりではないと思うのですが。

意見の方ですが、先ほど東アジア・サミットあるいは東アジア共同体に関する論議は「葬式」の段階、とのご指摘がありました。そうであれば、日本の責任は重いと思います。小泉首相が2002年1月のシンガポール演説で、「東アジアコミュニティー」にオーストラリアとニュージーランドを加えたことで、「共同体」論議はパワーゲームの様相が剥き出しになってしまいました。その延長として、今回のサミットではA S E A Nを運転席に座らせることになりました。しかし、A S E A

NにはASEANの限界がある。失敗ではないでしょうか。「仮免」程度にとどめるべきではなかったのではないのでしょうか。

ただ、マスコミの目から見ると、今回の東アジア・サミットというのは、外交ゲームを各国が剥き出しの形で展開した。その結果、東アジアの秩序が根底から変わっている様が、読者にも理解できた。日中、日韓関係が良好であれば、トゲのない外交用語でコーティングされて、そうはいかなかったかもしれません。

伊藤憲一 どうもありがとうございました。

それじゃ、ワンラウンドしましたので、残り時間十五、六分ですが、高田さん、山田さん、何か一言ずつ頂けないでしょうか。

山田滝雄 あまりにも幾つもの本質的な問題が出ましたので、短時間でとても尽くせないと思えますけれども、まず、ASEANプラス3と東アジア・サミット、この関係、これにどう対応していくかということ。特に、畠山さんのほうから話がありましたASEANプラス3を重視せよということ。これは、実は私どもも同感であります。もともと東アジア・サミットというのは、より大局的、戦略的な議論、協力をしていこうと。一方で、ASEANプラス3は8年間の実績があって、17の分野で48のフレームワークができていると。これをつぶすなんてことはあり得なくて、これはやっぱり機能的協力をきちんとやっていくためのフレームワークとして生かしていこうと。これが私どもの考えであります。

マスコミによって日中対立が煽られる傾向にあり、日本はEAS、中国はASEANプラス3と、何か色分けが新聞紙上でされてしまったものですから、そういうイメージができているんですけど、決してそういうことではありません。実際、ASEANからも、ASEANプラス3の首脳会談で、日本は引き続きASEANプラス3でリーダーシップをとってほしいということも言われていました、その準備は十分ございます。

具体的には、まさに浅見先生のほうからご指摘がありましたように、07年にASEANプラス3で第2の首脳共同宣言、これは99年に第1宣言に続くものなのですが、これを出そうじゃないかということ。そして、今、ASEANプラス3の協力というのは、02年のEASGの報告書の17の短期的措置と9の中長期的措置に従ってやっているんですが、だんだんこの報告もちょっと古臭くなってきていて、そうじゃなくて、もっと本格的な作業計画を第2共同宣言にあわせてつくりたいかということ、これに今回合意できたことは、ASEANプラス3の非常に大きな成果でございます。

しかも、こういった作業計画の作成に向けた今後の手順についても事前に話を始めております。ご承知だと思いますが、この夏に、私どものほうで、ASEANプラス3のこれまでの協力、それに加えているほかの東アジア地域の協力もございませぬけれども、これをまとめたデータベースをASEANプラス3外相会議に提出いたしました。実は、10月に開かれましたASEANプラス3の局長級協議では、このデータベースを日本が出したのはよかったと評価して頂き、これをもとにして、今度はASEAN事務局が、もっと本格的なデータベースをつくりましょうと。そのデータベースをつくるに当たっては、外務大臣プロセスだけでなく各大臣プロセス、それから、その後は、可能であればトラック2（有識者）にもお見せして、すべてのプロセスからコメントを

いただき、そして、本格的なデータベースをつくって、それを土台にしてきちんとした作業計画をつくっていきこうと、実は事前にそういう話を事務レベルでしております。

それをやるためには、ASEANプラス3ユニット、これはASEAN事務局の中にあるんですが、これを強化する必要があるだろうということで、私どもとしては、その強化のための予算も今確保しつつあり、かつ、人を送り込むことも考えていますし、そのための例えばシンポジウムなり何なりをやるための、活動費も負担してもいいという、そういう提案まで既にいたしております。

一方で、東アジア・サミットも極めて重要です。というのは、今回の東アジア・サミットの開催が国際社会に与えたインパクト、これはやっぱりすごいものがあるからです。これだけ国際社会が東アジアに関心を持ったというのは、やっぱり東アジア・サミットを開催したという、その事実自身が大変大きな意味を持っていたからだと思います。東アジア・サミットを毎年開催するということになったのは、ASEANの各首脳とも、自分が議長のに年に東アジア・サミットのない、ASEANプラス3首脳会議だけの順番になると、自分たちがスキップされたようにしか思えないからです。ASEANの各国とも、東アジア・サミットを主催したいわけです。東アジア・サミットによって、ものすごいモメンタム、盛り上がりが見られている、この点は良く踏まえる必要があると思います。

それから、もう一つは、私どものような役人にとっては、実務的協力が大変重要なのですが、これは私どもの視野の狭さがなせるわざというところもあるような気がいたします。首脳が集まって議論するとなると、それはやはり戦略的なビジョンを語っていただく方が遙かに相応しい。そういう意味でも東アジア・サミットには、今後更に盛り上がっていくものすごい潜在力があるんだと思うんです。もちろん、ロシアの参加問題とかいろいろな課題はありますけれども、そういうのを一つ一つ解決していけば、このサミットが大変重要な枠組みとして発展していくと思いますし、おそらくそういう戦略的な議論と、それから、ASEANプラス3やその他の枠組みで行う実務的な協力の促進、この両方が必要なんだと思うんですね。

一つ付け加えさせていただきますと、最近、東アジアのオーバーオール・リージョナル・アーキテクチャーという言葉が使われるようになってきました。これは、東アジア協力は、ASEANプラス3だけではなく、それ以外の様々な枠組み全体で進展しているということを使う場合に使われています。少し具体例をあげますと、金融分野では確かにチェンマイ・イニシアチブとかアジア・ボンドのような、ASEANプラス3の協力が進展しています。しかし、例えばFTAですが、実はASEANプラス3のFTAというものはないんです。FTAは、ASEAN+1、つまり、日・ASEAN、中・ASEAN、韓・ASEAN、豪NZ・ASEAN、インド・ASEAN、という枠組みを中心に進んでおります。それからあと、ASEAN統合に向けたASEAN自身の努力、例えばASEAN自由貿易地域の形成ですが、これも進んでいます。ですから、ASEAN、ASEAN+1、それから、ASEANプラス3、EAS、これを全部足して、さらにARFとPMCなどもあわせたものをオーバーオール・リージョナル・アーキテクチャーと呼び、これを全体として盛り上げていくことが重要だという認識が広まっているわけです。オーバーオール・リージョナル・アーキテクチャーという表現は、今回のEAS宣言でも使われ、EASはその中の1つという位置づけになっています。私どもは、EASを含め地域協力全体をきちんと盛り上げていくこと、これが

共同体形成の道であると感じています。

E A S の準備プロセスで議論が熱くなったのは、オーバーオール・リージョナル・アーキテクチャの中で、E A S だけが共同体形成とは関係ないんだという議論を一部の国が始めたからです。これは幾ら何でも言い過ぎだと。A S E A N プラス 3 はもちろん大事、A S E A N + 1 も大事、でも E A S も大事でしょうと。そういうものがみんな、相互補完的に進展するようにしなければ結局成り立っていかない。特定の枠組みを共同体形成から排除するというのはおかしいじゃないかと。これは、最初から豪州、ニュージーランド、インドに対して、あなた方には共同体に入る資格はありませんと言っているようなもので、私どもは、そういう扱いはできないでしょうということを申し上げました。マスコミの報道ではそこに焦点が当たって、それで、何となく日本は E A S、別の国は A S E A N プラス 3 というイメージが出てきてしまったんですね。ただ、実態は決してそういうことではなく、日本は E A S も A S E A N プラス 3 も、又それ以外の枠組みも全体を盛り上げていくべきだという立場であったということはちょっと申し上げておきたいと思います。

それから、あとは、いろいろとほかにもたくさんございましたが、アメリカについての質問がございました。アメリカは、この E A S を関心を持って見ていたことは間違いないと思います。ただ、結局、自分自身が入りたいということは言わないで、少し距離を置いて、それで物事の進展を見ようということをしております。ただ、1 つ大きな進展があったのは、A P E C のときに、ブッシュ大統領と、それから、A P E C に参加するすべての A S E A N の首脳が、初めて米・A S E A N 首脳会議を開催しました。これは、A S E A N 側からは、アメリカのこの地域へのコミットメントの証左と受け止められています。そのときに、「米・A S E A N エンハンスドパートナーシップ宣言」というものが発出されたのですが、その中で、アメリカは、T A C (東南アジア友好協力条約) の原則と精神を支持するとか、そういうことを言ってみたり、A S E A N 重視の姿勢を改めて非常に強く打ち出しました。これはアメリカの関心の度合いを示す 1 つの出来事であると思います。

それから、あとはインドの参加についてご質問がありました。今回インドの E A S 参加が実現したのは、ご指摘のように A S E A N の一部の国がインドの参加を強く支持したことによるということとは確かにございます。ただ、その前の段階で、E A S を A S E A N プラス 3 だけでやるのか、それとも、もう少し包含的な枠組みにするのかという、そういう議論があったのですが、そこで、包含性について一番有効な議論を展開したのがやっぱり日本であったと思います。あと幾つかの国もそれに共鳴してくれました。その土壌があって初めてインドの参加、豪州・ニュージーの参加が実現したということをございまして、そういう意味ではやっぱり我々の役割は重要であったと思います。インド側もそれは非常に高く評価してくれておりまして、以降、インドとの会談では必ずこの話が出ます。今回の E A S の際に、小泉総理とマンモハン・シン首相の首脳会談が実現しましたが、そのときに、そういう背景もあって、「インドは日本を対東アジア政策の扇のかなめと考えている」という、最大限の評価と賛辞がシン首相から表明されたということは申し上げておきたいと思いません。

それから、ロシアにつきましては、先ほど申しましたように、我々もこれにはしっかりとした問題意識を持って臨みたいと思っております。この問題には、ご指摘頂きましたようなさまざまなインプリケーションがあると思いますので、これは十分慎重に対応すべき問題で、2 回目に向けた大

変重要なポイントだったと思います。

それから、universally recognized valuesを入れたということ、これは、東アジア地域協力のプロセスが国際社会から信頼を受けながら進むためにも、それから、我々の中に相互の信頼というのを高めていくためにも、やっぱり価値を共有しないと相互の信頼関係は難しいところがあると。非常に大事なポイントであります。2003年の日・ASEAN特別首脳会議のときに東京宣言を出しました。そのときに、日・ASEAN協力の基本精神として普遍的価値を入れ込んだということがあります。それ以降、実は、ASEANの文書の中にも普遍的価値が頻繁に出てくるようになりました。今度のASEAN首脳会議でも、ASEAN憲章設立宣言というものが出されたのですが、その中で、ASEAN憲章の検討プロセスでは普遍的価値というのを重視していこうということがASEAN自身のイニシアティブで明記されています。それから、あと、今回のASEAN首脳会議では、ミャンマー問題についても、ASEANが初めて、内政不干渉の原則がありながら、ASEANとしてのミッションをミャンマーに送ることで合意をしました。これも、ASEANがこういう問題に対する意識を高めつつある証左ではないかと思います。

柿沢弘治 その点で、NEAT総会で、デモクラシー・ヒューマンライツ・アンドということユニバーサルバリューがあったわけですが、それはだれかが整理したんですか。

山田滝雄 それは、私どもがお願いして、伊藤先生が大変頑張ってくださいですね。あれも大変よかったと思います。NEAT総会についても今回のASEANプラス3首脳会議で言及がありました。どうもありがとうございました。

柿沢弘治 それよりはちょっと弱い表現になっているでしょう？ユニバーサルバリューというのは...

山田滝雄 EAS宣言に、デモクラティックという単語は入ったんですけども、本当の意味でこれが地域に受け入れられているかということ、まだまだでございます。ただ、少しずつ少しずつ浸透してきているということはございます。

それから、あとはもう一つ、経済単位としてASEANプラス3が最適なのだというご意見については、先ほども申し上げましたが、例えばFTAを見ますと、ASEANプラス3のFTAというのはなくて、既にASEANと豪州、ニュージーランドとの間ではかなりFTA交渉が進んでいますし、ASEANとインドのFTA交渉もそうでございます。それから、インド・中国間では貿易がすごい勢いで伸びておりまして、去年は125億ドルまで伸びて、来年ぐらいには300億ドルに行くのではないかととも言われております。ASEANとインドの貿易もどんどん伸びております。ですから、経済実態の問題としても、実は、ASEANプラス3だけではなく、豪、インド、ニュージーランドも巻き込みながら地域統合が進展しつつあるという実態が出てきているのではないかと思います。

吉田春樹 ちょっと一言だけ。また畠山さんからご批判を受けるかもしれないですが、私は、今、ASEANだとか中国がやっているFTAというのは、本来のWTOで決められているFTAをあまり厳格に守らない、例外規定のところをかなりイージーな形で使っているのではないかと。それがあまり出てくるのは困るという立場に立つてのFTAと申し上げたのです。

山田滝雄 ただ、経済実態の問題として、何かかなり地域の視界が変わってきているということ

もありますので、そこはよくよく考えてみたいと思います。金融協力の参加範囲というのは、金融当局の間の協力関係のあり方で相当左右されるのではないかと思うのですが、貿易というのはもっと自然的な動きがあって、そこにさおが差せない部分があります。それから、日豪のFTAの可能性ですが、これについても共同研究は始めました。農産品の問題はありますが、WTOラウンドの動向も視野に入れながら可能性を探るべきだと思っております。また、日印間でも、FTAの可能性も含めた共同研究を立ち上げたところでございます。これらはASEANとのFTAをすませた次の課題ではありますけれども、もう既にいろんなプロセスが動き始めております。ですから、経済実態に合うグルーピングは何かということ、ちょっとよく考えてみたいと思います。

済みません、あまりにもいろんな論点がありまして、よろしゅうございますでしょうか。ほかにこれはということがございましたら。

田島高志 コミュニティーって、さっき、字面、技術的……。

山田滝雄 それは、確かに、ご指摘のようにcommunity building in this regionという表現には同床異夢的な面があるという見方があるかもしれません。他方、我々としてみれば、東アジア・サミット宣言の中でthis regionと書いてあって、それが「東アジア」以外のものを意味し得るのかと言われれば、それはおよそ考えにくいのではないかと思います。

伊藤憲一 ちょうどびたりと予定終了時刻の4時になりました。高田さん、山田さん、田中さん、今日はありがとうございました。では、これをもちまして閉会いたしたいと思います。(拍手)

了